



第5回

「原発事故と心の疼き（うずき）」—ある技術者の小さな行動

平成 23（2011）年 10 月

東日本大震災と福島第 1 原発事故は、日本および日本人に深い傷を残した。その傷は事故から半年がたとうとしている今日でも、癒えることなく、いや、むしろ激痛が続いている。

阪神淡路大震災で、高速道路の橋梁が崩壊したときの土木技術者であれ、今回の惨状を防ぎきれなかった原発技術者であれ、最先端技術と世界一の安全技術を心中、ひそかに誇ってきたはずなのに、また、その水準の高さに誇りを持って生きてきたはずなのに、心の中の柱のようなものが、ポキリと折れてしまったような、空しさを抱いている技術者は多いのではないだろうか。誠実に生きてきた技術者ほど、口にはしないが、心の芯の「疼き（うずき）」、痛みに耐えかねているのだと思う。

そんな時、1 通の手紙を受け取った。荒川文生さん（71）。ワシントン勤務当時の、30 年来の友人で、テニス仲間でもある。長崎県松浦の発電所など九州に出張の時は、新聞社に顔を出し、楽しく、ひと時の雑談を交わして、飄々と東京に帰っていく。御尊父は、荒川文六氏で、九州帝国大学総長を務め、電気工学者である。文生さんも電気工学を学び、日本電源開発に勤め、現在は技術史を研究している。

原発事故とその後遺症に直面し、自分が電気技術者として、この惨状とどう向き合えばよいのかを文生さんは考えた。勿論、福島原発事故に直接関与しているわけではない。しかし、電気技術者として、何か自分は責任をとる行動を取らなければならないのではないかと。特に、技術者倫理を口してきた以上、勿論、こんなに明確に意識したわけではないだろう。一種の「ぼんやりとした気持ち」として心の中にであったらうか。

ふと、自分が属している電気学会の「倫理綱領と行動規範」が目に入った。

「会員は、電気技術が公衆の安全や環境を損なうことにより健康及び福祉を阻害する可能性があることを強く認識し、技術が暴走し破滅的な結果を招かないよう、安全の確保と環境保全のため常に最大限の努力を払うとともに、安全と環境管理に対する責任体制を確立する」

今回の事故は、学会も会員である自分も、明らかにこの条項に違反している。学会を脱退するわけにはいかないが「資格停止」を申請しよう。「心のけじめ」が見つかるかもしれない、そう考えた文生さんは実行した。珍奇な行

動と笑われるのを覚悟してである。受け取った学会事務局は取扱いに困惑した様子で、現在「処分保留中」であるという。

今日の日本の経済大国、技術大国を築いた技術者たちの「誉れ」が瓦解しそうな、福島原発事故。現場で悪戦苦闘している技術者たちの日々の苦悩と、文生さんの「小さな行い」は比ぶべくもないけれど、一技術者のやむにやまれぬ気持はよく伝わってきた。我々は、誠実で、本当にいい技術者を持っている。技術には「門外漢」の私の心にも、東日本大震災と原発事故で重い気分の毎日だが、一通の手紙が涼風を運んできてくれた（了）

玉川 孝道（西日本新聞元副社長）

夢アイデア審査委員長（平成 22 年～令和 2 年）